土屋文明著

アララギ叢書
第四十三編

歌集

往還集

岩波書店刊行

歌集

往還集

土屋文明著

岩波書店

歌集

往還集

土屋文明著

岩波書店

土屋文明著

アララギ叢書第四十三編

歌集

往還集

岩波書店刊行

往還集目次

大正十四年

冬日閑居……一
植物園……二
上總富津海岸……三
死刑囚の棺……五
足利法樂寺山……六
明日香にて……九
吉野菜摘村……一一
叡山所々……一五
伊香保にて……一九

下宿住ひ……二〇
百合の樹の花……二二
湯元の道……二五
或る友を懐ふ……二〇
家常茶飯……二二
亡弟を……二四
蓮を見る……二五
關宿……二七
十二年九月某日……二九

大正十五年（昭和元年）

熊野勝浦……四一
那智……四二

大雲取越舟見峠……四三
小口村旅宿……四九
小雲取遠望……五三
音無川……五四
坐社……五五
熊野川を下る……五六
銷夏雜詠……五九
蚊を燒く……六一
かへり花……六四
田端新居……六六
伊香保……六六
女兒命名……六九

懐舊五首……七〇
碓氷嶺……七二
武藏野……七四
歳晩銀座街頭……七八
人々に……八〇
春夏雜詠……八二
伊那にて……八四
五月雨……八六
三峰山……八八
田端を去る……八九
武藏秋川峽……九二
箱根雜詠……九五

三峰山安居會……九九
五智濱……一〇二
谷濱にて……一〇四
信越國境……一〇六
佐久にて……一〇八

昭和二年

落葉を燒く……一一一
旅中……一一六
余地峠……一二七
高崎をすぎて……一三三
又ふるさとにて……一三三
椎のふる葉……一三五

千曲川……一二七
水内郡……一二九
妙高山麓……一三二
飯山正受庵……一三四
左千夫先生十五回忌於普門院……一三七
龜……一四〇
姑の訃に故里にかへりて……一四一
人々の喪に……一四三
生者吟……一四四
坂本先生を偲ぶ……一四七
初秋雜詠……一四八
子供等を……一五〇

清水越……一五一
妙高温泉……一五五
淺間山……一五六
信州往來……一五八

昭和三年

妙高池の平にて……一六一
祖母を悲しむ……一六三
木曾の花祭り……一六五
信州別所……一六九
久宮様御葬列……一七一
小此木信六郎先生を哭す……一七三
迎春賦……一七六

春ゆき夏來る……一七八
荒川水門……一八一
日常吟……一八四
西國よりかへる……一八六
父病む……一八八
秋となりて……一九〇
阿蘇噴火口にて……一九二
伊香保榛名……一九五
外濠小景……一九九
當所思古之歌
越前氣比神宮……二〇一
赤間が關阿彌陀寺御陵……二〇二

備後鞆の津……二〇三
筑紫觀世音寺……二〇四
久留米には高山彦九郎の墓ありと聞く……二〇六
御大典間近に……二〇六

昭和四年

木曾伊那……二〇九
日常吟(一)……二一四
偶感……二一六
歳末歳首……二一七
吾が新年……二二〇
阿蘇湯の谷安居會にて……二二二
御大禮觀兵式の日……二二四

父なほ病む……二三六
日常吟(二)……二三八
茶臼山雲水寺歌會……二三一
三月某日……二三三
箱根行……二三四
信濃松原湖……二三五
日常吟(三)……二三八
六月二十六日……二四〇
七月二日一家總持寺に詣づ……二四二
盛夏雜詠……二四四
唐津……二四六
霧島山……二四八

大分紅蓼庵……二四九
別府……二四九
高松港……二五〇
潮ぐもり……二五二
歳晩雜詠……二五五
卷末記……二五九

大正十四年

冬日閑居

休暇となり歸らずに居る下宿部屋思はぬとこ
ろに夕影のさす

冬至すぎてのびし日脚にもあらざらむ疊の上
になじむしづかさ

四月より決心つかざりし心さへ少しきまると
思ふこのごろ

植物園

人去れる震災バラックの軒下にまける青菜も
かじかみてあり

温室をいづれば午後の日は寒し子供芝生に身
をよせて居り

他家の子の猿みて遊ぶ悪戯に注意の言葉云ひ
て去りたり

上總富津海岸

砂よけの垣根にのこるはだら雪砂の上の影を
鮮かにみす

松低くみぎはにつける砂濱の鋸山に限られに
けり

松原をはるか汀に近き家かた屋根かげに雪の
こるみゆ

砂丘おりてま近に見ゆる松原へ先刻の人のま
だ歩み居る

死刑囚の棺

死にすればただあはれなり枯草の土堤を上り
て舁かれゆきけり

鐵橋の下の河原をゆく棺默々しくも人のしたがふ

ところどころ川水光る夕暮を人の棺は渡されにけり

足利法樂寺山

向うなぞへ雜木の間を動く人日のうするれば影の如しも

兒と坐りネーブル蜜柑を食ひ居ればいで遊ぶ人われのみにあらず

きさらぎの樾おのづと芽ぐみ來て子をつれし人の幾人も居る

春の日のさして静けき片なぞへ影もちて目立つ地面の澎らみ

童ども寄りて枯株をゆすり居り科おもしろく聲は聞えず

幾年も此の國に住まず忘れ居ぬ今日二月の午後のなごめる

きさらぎや山もなごめり子をつれて事多かりし去年を思ふ

明日香にて

うららかに大和の國の山低し多武の社のすぐそこに見ゆ

山の上の大空に透きて鮮けき木立の中に甍重
重し

貝ボタンすりて業とす明日香人かげろふの中
に貝屑を捨つ

明日香川岸の崩處の孟宗藪貝殼屑を捨てため
にけり

吉野茱摘村

西河へ越ゆると人のゆきし路篠藪かげにせま
く入りにし

山のかげ此所に及べる小學校授業時間の庭の
しもどけ

校庭のひそかなるそばを通りぬけ宮瀧川の上
にいでたり

水際にくだれば岸の岩高し淵にさし込みて青
き日のすぢ

淙々と流れて落つる川水はひくく溜りて綠青
のごとし

いにしへの瀧の河内はからからに遊びあらし
て岩のよごれし

水減りて石ならび居る夏實川面白くなりて靴
にて渉る

谷せまく家居乏しき菜摘村高菜の畑に雪ぞの
これる

見おろせば夕かげ早き川隈に丸太は白く組み
上げられつ

岸の藪刈りそけて一面に茂りたる菁莪のなび
きや夕あかりせり

川をへだて向栞摘は夕日てり手を上げし子供
何かいふらし

己が兒の名にのらしめし栞摘村地圖と見くら
べ人にききをり

叡山所々

朽ちたるもまだほのぼのと匂へるも散りてた
まれり沙羅の木の花

玉垣の外さへ清き白沙に掃きよせられし沙羅の木の花

み墓べに立ちし沙羅の木なよなよと梢にのこる花の少なさ

山隈の繁りに下げし山人の割籠いくつか見て通りゆく

谷風に草を刈り居る人ならむ割籠吊しぬ青枝のかげ

山の間ゆ野洲の河原ひろがれり雲がかげする青き國原

山深く草さまざまに名を知らず道に親しきおほばこの花

木下闇恵心僧都の墓場道天南星は折られながらに

眞木山の少しひらけし小笹原夏山蔭にこもる墓むら

おのづから涼しき山は深くして墓を竝ぶる僧に名のなし

伊香保にて

夕されば自炊の客の燒く鮭の湯の空腹に應へてにほふ

むれくさき鹽引の香のただよひてわが生ひ立ちの日を思はしむ

買はしめし鮭からくしてうまからず貧しきうちにかくなりにけり

下宿住ひ

天皇の祝日にもらひし休み日も一日ねむたく何も出來ざりき

女中等は花電車見にゆきにけん白湯冷え果てて夕さりにけり

さきの日に來りし吾子が忘れゆきし三色糖の瓶の光れる

時計形の瓶にのこれる金平糖は動物園にて買ひたるなり

二階にさわぎ居し人等いで行きぬ電話長々と
漏れ聞ゆる

下宿部屋の冷き疊に覺め居り青葉の映えもく
らくうすれて

百合の樹の花

五月末となれるに冷ゆるくもり日の街路朝は
やき百合の樹の花

立ちとまり仰げば多し百合の樹の花は一樣に
天を受け咲く

百合の樹の青き花瓣を包みたる萼のうす黄に
ぶく搖れゐる

下枝に靡きかたむける花ありて蘂を露はしぬ
あはれその蘂

出勤時の鋪道に落ち散りて人はみざらむ百合
の樹の花

百合の樹の切りたる花の大きければ青葉は垂
れぬバケツを覆ひて

切られたる上向の花は抱へつつ蘂を包めりそ
の太きしべを

こずゑには蕾なるあり咲けるあり子房あらは
に散れるかなしさ

湯元の道

湯の川の岸に時ならずのびすぎし羊歯の葉さきは霜に打たれぬ

凍り居りし谷とくるらし岩崩のこだまは遠くにぶく近くも

浴客あそぶ谷道あたたかく湯川の湯氣は川になづさふ

よその人去りたる谷の靜かさにこだまを打てる幼兒のころ

みなぎらひ霧らふ春日かみ湯の上の木群が末は煙るばかりに

幼兒を日陰はざまに伴れのぼり凝れる雪を掘りて食はしむ

崩え土をかうむれる雪ともしかも人既に掘り
て指のあとあり

うから等が食ひ飽きたる凝り雪手にのこれる
を投げつつかへる

すくすくと水樹の枝は紅深しかつて弟とわれ
と來にけり

雨あとの坂に白足袋を汚したりし母もいまだ
若くありにき

歩けなくなれりと云ひて這ひいだす幼き兄を
草子も笑ふ

春の日の過ぐらく知らに草臥れし子は道の上
を這ひてたはむる

或る友を思ふ

ただひとり吾より貧しき友なりき金のことにて交絶(まじはりた)てり

吾がもてる貧しきものの卑(いや)しさを是(こ)の人に見て堪へがたかりき

かにかくにその日に足れる今となり君をしばしば吾れ思ふなり

電車より街上(がいじやう)の姿を君と見しが近づく人は君にあらざりき

生き死(しに)の消息(せうそく)も分かずなりにける友を思ひて電車を下(くだ)る

家常茶飯

家かりてうから睦(むつま)しく住まむため語らむとして歸り來にしを

むづかる兒見ぬがごとくに食(くら)ひ居る妻に罵(ののしり)をはきかけにけり

幼兒が呼び居る背後(うしろ)の篁(たかむら)の夕あかりして吾は立ち去る

憤り立ち出でしかば幼兒の買物(かひもの)をよく聞かず來にけり

罵(の)らるればふくるる妻も老いにけりかくして吾もすぎはてむとす

亡弟を

おのが子の二人となりて生ひ立てば汝(いまし)を忘れ
思ふ日多し

わがうから遂に歸らざらむ故郷(ふるさと)に汝(な)がおくつ
きの年古(ふ)りにけり

思ひつつ十年(とせ)に近し母がいふしるしの石もい
まだ立てなくに

蓮を見る

閑(いとま)ある日を幼兒と今朝も來て土手にしやがま
り蓮をみて居る

吾が心澄むとにはあらじ朝影ににほへる蓮に
歩み止めつ

見るからにくづるる花片葉にたまりにほふ紅
水に浮べり

二十五菩薩來迎圖散華の朱をほめ給ひし左千
夫先生目なかひにみゆ

ひと片の花のにほひに畫の技のこころをみよ
と教へ給ひき

いにしへのよき人たちが極樂を懸けし心もお
もほゆるかも

關宿

わびわびて吾は來にけり草そよぐ堤をこえて
光る川水

秋あつき川の光に据りたる浚渫船は今日休み
なり

築きたる高き堤のゆふかげに落つる江戸川と
どろとどろと

さかまきて渡の舟を流したるたぎちの中に人
聲きこゆ

十二年九月某日

ことなれる世すぐししつつ今日相より四人同
胞青葉まき居り

明日燒跡平しにゆく弟に食はしむべく青菜を
間引く

間引菜を饂飩に煮たる打ちかこみ幾年ぶりぞ
と誰か言ひたり

大正十五年（昭和元年）

熊野勝浦

ほのぼのと明け來る山にかかりたる瀧遠白く
見たるあはれさ

諸共にあはれとは云へ舟はててかなたの山に
かかる瀧つ瀬

那智

石垣を廻れば瀧のまともなり瀧の所まで雲は
下り居て

雲間よりひと條にくだる瀧つ瀬は落ちかくれ
けり杉の秀村に

立ち去りて心戀しき瀧水を群杉の幹のあひだ
に見たり

杉の木にふる雨の中に聞え來る瀧のひびきは
山傳ふらし

大雲取越舟見峠

色川へ分るる道は廣けれど大雲取の道はしげれり

ま熊野や昔平清盛がゆきけむ道もあれにけるかも

谷深く見えゐし瀧もかくろひて山鳩のあとに繼ぐ鳥もなし

雨はれて光になびく茅の原山のいきれの寄せ來るかも

草原に斑日影の移りつつかたまりて咲く姫百合の花

山の峽色川村が見えにけり小學校の庭ひろびろとみゆ

帽子ぬぎ汗ふるひ居るわが友のゆるきズボン
に疲労はしるし

道の上に桐油をしきてころぶせば油臭きもむ
かむかとして

下りゆきて掬ぶ木したの谷水は少し杉葉のに
ほひ移れり

遠世人こころ思ほゆ石しきて高山みちを神に
詣でし

平びと藤原びとも願もち越えけむ道の苦はし
げれり

山水は草より湧きて清々し山葵うゑまく思ひ
たるかも

願はくは吾が世の果を山水にわさび植ゑむと
いはば誑か

うれひつつ歩みつとむる人の後にわが祈事の
小さかりけり

言にいでて云ふすべもなき心には共に山水ほ
め給ふらし

小口村旅宿

大雲取我越えしあたり夕雲の下り居かくせば
高くし思ほゆ

峠はてて人家なつかしくすぎし村此處にして
見れば山の上なり

芝山の羊齒の茂りも夕づきて下る目下に今日
の宿みゆ

草臥れて脱ぎたりしかば行滕の山蛭の血にお
どろき騒げり

筏くむ人と語りて足袋洗ふ夕谷川の音のさや
さや

藤の實のたれしつり橋に居りしとき友は呼び
たつ湯より上りて

大雲取小雲の峽の小口村をみな二階に夕粧ふ
あはれ

山峽の朝のすがしさ青雲と思ふ空より小雨そ
ぼふる

まれ人の吾等もてなすと掘られたる芋のずゐ
きにふる朝の雨

裏畑の芋に雨ふるかなたにて口嗽ぐ少女去り
にけるかも

案内者は疊の上の案内料數へてやがてかへり
ゆきけり

小雲取遠望

夏の光するどく空にうづまけり崩れ著き十津
川の山

たたなはる山のはたてを限りたる大和十津川
の赭き山くえ

眞ひる空晴れ極りて白雲は崩れいたましき山
につきをり

あさみどり空につらなる遠山の一ところ大き
く崩れたりみゆ

音無川

紀伊の國音無川と聞きしかど水かれてわらべ
鮠打ち居たり

炎天を音無川に來りけり魚追ふ子供しばし見
て行け

坐社

移されて齋杜も立たぬ宮作眞ひるの陰の濃き
をかなしむ

御手洗の水を含めばなまぬるし卽ち廣前には
きすてにけり

熊野川を下る

瀞へゆく川の分れに來しときに二人下りたり
草鞋さげつつ

下りし人草鞋はき居るしばらくを舟はやすら
ふプロペラを止めて

宮井すぎ日足に落つる赤木川細き水上は昨日
渡りき

野菜苞さげて舟まつたわやめの眉あとあをく
剃れるわびしさ

焼山の岩ほの肌はあらはにて幾筋も幾筋も瀧
はしり居り

火にやけし杣には雲のかかり居て岩傳ふ水し
らじらと落つ

ややしばらく焼山を見て下りけり岩そそぐ水
細きよりして

銷夏雑詠

ともしき朝水を風呂に汲みつくす水道技師も
罷められたらし

青だいしやう追ひ込みし崖には線香を立てさせて又晝寢せむ

秋近き風とかも言はむ今日の午後赤松山の幹が目に立つ

借り家(いへ)のさ庭の植木かげを疎(あら)みからび果てたる苔もすべなし

幼兒も遊び入らしめず水打ちし庭はからびて夏すぎむとす

おびただしき雀の糞を踏みにけり足利學校の門の敷石に

蚊を燒く

ほころびを縫はざる妻を毒づきてあけ近き蚊
蠅に蚊を燒殺り居り

夜ふかく父母爭ふを見たりける蚊蠅の眠よ幼
かりけり

蚊蠅そとにひそひそ風呂敷を包み居し母を蔑
む心今なし

裸身にて蚊を燒く吾や蔑みし父にいくらも變
らざりけり

のびのびと吾が幼兒は眠り居り朝の光に五位
鷺の鳴く

やかましかりし蛙の聲の少なくてこほろぎ聞
ゆ秋や來ぬらむ

かへり花

をさな兒と夕ぐれ時を來りけり櫻若木はかへり花して

寺の門くらき閾跨ぎゆけば影ほのかなり櫻かへり花

かへり咲く木よりは高く落葉してしだれ櫻は老いにけるかな

ゆらゆらと花輪を運び人の居る夕ぐれの寺にかへり咲く花

寺にゆかぬことをいぶかる幼兒に通る牛の角を見せしむ

田端新居

しぐれ來る厠に下りて隣家の門の灯届くを乏しとぞ思ふ

伊香保

岩腹よりほとばしる水光る見て湯の澤川の橋渡りたり

山の陰深く崩えにし岩嵯峨の水を朗らに日は照しつつ

山雀の啼きかはす聲はするどけど木魂寂しく谷傳ふなり

きその夜を眠らざりける勞れあり山雀のこゑ
からだに應ふ

持ちたるは山刀かときしかば童子は鉈を拔
きてみせたり

切り崖に洋館の壁に日はさして一村竹の根を
落つる水

べに殼のあせし洋館に石竹色の帳たれたり何
か思はむ

照りかげり雪に明し二谷より落ち來る澤音き
こゆなり

女兒命名

はるの日の枝にふふめる白梅のすがしかれと
の父がねがひぞ

懐舊五首

疎ましと思ふしばしば吾がゆきし臘梅はいま
もありやなしや

南寮二番のうらの臘梅の咲くべき時もすぎに
たるらし

たはやすく神經衰弱と吾もいひてはかながり
にしつくり心か

葉ひらきてしばし伸びなづむ梧桐のもどかし
ささへ吾知りにけり

うつうつとまだ通ひ居るスチームに窓べの櫻
開きそむるぞ

碓氷嶺

何の木の花とは知らず谷かげに黄色静めり垂
りて咲きつつ

小竹村に霜枯の葉も見ゆるなり坂本町を見お
ろすところ

碓氷嶺を下りて親しき眞土山篠やぶ中に桃さ
ける見ゆ

土山に杉の群生の静かなりわが故國に一夜ね
むらむ

櫻花開きかけたる下にして芋田樂をみればな
つかし

磯部の鹹き湯あみつ足病みし蛃魚先生思はざ
らめや

武藏野

電車の中をわれは眠りて下り立ちし町の通り
は山に向へり

小松山なごめる奥に歪なる山高くして雪はま
だらに

いづくにも住むべかりけり高麗人が住みつき
しとふ山はしげ山

はるかなる高麗國ゆ來つ武藏野の山かたつき
て住みし人等よ

高麗王の墓所にも詣でねば畑すみの葱青むを
見たり

淺葱を茶の根にうゑし家いくつ機の音こそか
そかなりしか

停車場の物賣小屋に風吹きて將棋さすをばし
ばしのぞきつ

槻のしたに庭鳥市を見て居りしが油揚うどん
食ひにけり

一日の風をさまりて月代の立てる野の上をか
へり來にけり

あはれなる聲を門よりききにけりわがみどりごに今日は名づけむ

歳晩銀座街頭

去年此所に十三圓をすられしか今年はわれも少し富みたる

瀬戸物を撰り出し居る人妻よ濃き白粉に夕かげりして

夕ぐるる屋上園を人閉ぢて猛獸の檻に幕たれにけり

街のさわぎ唯とどとしか聞えねば九官鳥の叫び高しも

諏訪の湖の鮒をうまらに煮て持てり町をこえて父と母とあれば

歩みおくれし子供はしくしく泣き出せり貫ひしびらを何所に落しし

人々に

くぐもれるうす青釉の埦持ちて山川水をのみにゆかまし

君がたびし柿の朱色ふかければ信濃の秋を戀しとぞ思ふ

御所柿を玉と抱ける幼兒は信濃に生れて信濃を知らず

春夏雑詠

わが歌に人の賜ひし錢をもて買へるあを瓶水
すがすがし

さしなみの隣の櫻咲きにけり二階をあけて一
日あそばな

今日の日もガラス戸の外に夕づきて西空ゆゆ
しほこり雲立つ

錢湯にゆきたしといふ幼子をひた叱り居り吾
も汗ばみて

幾ときをわが坐り居し夕されば立ち働ける妻
のきこゆも

逆(さか)およぎしてはす葉(は)娘(むすめ)と呼ばれたる金魚死ね
ればすくひ捨てつも

信濃をとめがくれし山葵(わさび)もくさりはてつその
白砂を洗ひ上げたり

伊那にて

くい心ありもあらずも桃咲ける明るき山は見
るべかりけり

ほのぼのと野の上の桃の遙かにてま近くの阻(はば)
影つくるなり

眞日てりて桃はなやかににほひ立ち傍(そば)の櫻桃(みざくら)
の花はさぶしき

あらあらしき新墾原のあはれひとつ松あはれ
日にてらされて

くえ阻の下のあたりは雪しろの流るる川といへど見えざり

五月雨

こんにやく玉はくさりたらむと云ひながら椎の落葉を妻は掃き居り

五月雨に濁る井戸水すべをなみ妻はかし家を見にいでにけり

雨の中をかへり來し妻はこの家の椎の若葉をほめつつすわる

三峯山

栃の花一谷咲ける向う山は切り開かれて桐の花畑

立ち止まれば雨こそ聞こゆひと谷の白黄の花すぐといはなくに

栃の花桐の花それより高くして巌にかかる藤浪の花

うち霧らふ樅の大木の山に向きてひとむら竹の雨にしなへる

田端を去る

いきどほる心にあらず家主の言のままに移
れとぞいふ

家主の足痛刀自のみそかごと夕餉の時に妻は
談れり

毒舌をはきて立ちゆくちんば刀自ころぶはし
かしをかしかりけり

田端の木立よろしとこの夕べ近き梟を子等と
聞き居り

み墓べに近くすみつつ今もへば吾はおほくも
詣でざりけり

かにかくに住みつきたりし椎がもと今夜もお
そく木戸をあけつつ

雨の夜を思ひつかれてわれは來つ電車とまれば下りにけり

こんにやく玉掘りてよろこべる子供等を二階よりわれは指圖しにけり

武藏秋川峽

寒々と岩かげ道をあるき居れば向う日向の畑ぞ親しき

向う岸を馬車ゆくきしみきこゆるにいよよ靜けしそこの夕日は

いち早く谷深き水はくれにけり音のひびくは瀨を立つらしも

尾を垂れて雉子(きぎす)は谷を渡りけり卽ちひびく銃(つつ)
こだまして

晝ごろより雪の上は來つ夕かげに粉(こな)ひく母子(おやこ)
に問ひよりにけり

雪うがつ山澤(やまさは)水(みづ)に見いでたる自然(しぜん)山葵(わさび)よ採れ
ばかをるに

ゆきの下に得たる山葵(わさび)のしたたりは風呂敷な
がら凍(こほ)りつきぬる

甲斐の國へ山はくだりとなりにけりくろもじ
の花折りて急がむ

箱根雜詠

馬並めて草刈機械引き來る音のよろしも草切るおとの

春草のきられゆく野を横ぎりて過ぎにしわらび吾はひろべり

山藤は草原にして咲きにけり人や行きけむ葉のこかれたる

草山をいくつも越えし草の原おそ山藤の這ひつつぞ咲く

春山をこえつつ來れば硫黄くさし白きいで湯を箱にためたり

草山のかげのくぼたみ並べたる箱に溫泉を引きて人居り

天つ日にてりつけられし湯の湛へ湯花しづかに澱みつつあり

いくつかの箱を流れて澄みにける湯は落つるなり荒き石川

山道にむすび食ひたるしばらくを楡のひこばえ吾はぬき居り

三峯山安居會

競ひつつ鳴き居たりしが一つとなりほがらに寂し佛法僧のこゑ

佛法僧よひよひ啼きし眞木のうれに生ふる和羊齒見て下りなむ

よき人に今日をたぐひてふるさとに來しくも
しるし山河を善み

毛の國はよろしき山の川の名を告げつつ吾は
樂しくもあるか

吾が背名といり野の道をゆきつきてふるき石
文今ぞみにける

ふる里のよき山川を友と見て吾家の方と指す
方もなし

ふるさとの吾が村のあたり今みれば木高き杜
もきられけるかも

ながながと見えあらはるる利根川の夕日はし
るし國のまほらま

芝山に合歡の木生えて蟬のこゑ電車の中にきこえ來にけり

五智濱

親鸞上人のみ舟はてたる跡どころ居多濱の碑はまだ新しき

あら荒しくいそ崩れしていにしへの泊のあとは茅萱のびにけり

藤井善信も安壽姫も思はざらむねむり足りてわがたもつ體力

幾日も佐渡を見ずといふ今朝の海灯しらじらかかる船みゆ

谷濱にて

越(こし)の國蟲生(むしふ)の濱の草いきれ吾はなぎさに下りて歩めり

道くまに見ゆる佛に花たをりそこまでゆかず濱にくだるも

うら戸出でて直ちに近きやま小田(だ)に合歡(ね)木(む)のひともといま盛りなり

ねむの花は砂丘いくつも咲きつらなり凪(な)ぎたる海がそのさきにみゆ

合歡(ね)の花の彼方(かなた)の海に入らむ日や汽車とまり處(ど)に汽車とどまれり

つらなれる合歡の木原のゆふひかり赤々とし
て汽車とほるなり

信越國境

なよなよとかたまり見ゆる青萱の野は黒姫に
つづきたるらし

月かげに立てる黒姫をたちまちにさへぎる丘
や青萱の原

黒姫はしばしかくろふ青萱の野のしづけさは
露やおきぬらむ

くもり夜の光にたてる黒姫のおほらかにして
人をこほしむ

青萱の野はとほひろのうす月夜山にかけにし
命をぞ思ふ

佐久にて

けさ越えし青枯野べのつゆ霜のうつくしくし
てすぎにけるかも

こともなく列る秋の山にして目にたちて見ゆ
石切りどころ

草の實はうら枯れにけり此の驛の貨物置場は
切石のみなり

ゆまりして石の値段をとひいでつ佛の年忌思
ひみにけり

生きて世になさねばならぬ吾が事の怠られつつ思ふ寂しさ

吾に尊き人の病みつついますさへただに聞き居て幾日すぎけむ

昭和二年

落葉を焼く

幾年ぶりのことならむ子供等と落葉やくに先づ吾がうれしけれ

いくばくもなき庭落葉たき飽かね松のふる葉をとりてくべむよ

枯れすすき今しばしおけ一束の葉ぬれしぬぎて雪もふるがね

松の木の下土の霜ひるすぎてとけざる程を歸り來にけり

射的場の草山かげに白々と見えにし霜もひるすぎにして

苔も土も荒れはてにける庭の上に松の落葉をふみこねにけり

あそびほけて子等はありつつ歸りたる父が呼ぶにはかへり見るのみ

蘭蟲の一つ生き居る水盤を縁にかき入れて冬がこひすも

夜ひとよ野分をさまらず縁がはの鉢しづかなり丸子のかがやき

すべきことなしとにはあらず子供等とこんにやくこねて今日も遊べり

幸さいはひと今日をいはむか溫ぬくもれる鉢の金魚のやすきを見つつ

夏すぎていつしか疎うとし井戸のへの冬あら草はのびにけるかな

外にすてし出來ぞこなひのこんにやくに今ゆふ時雨しぐれふりいでにけり

ふるさとの山ゆきし時買ひて來しこんにやくも今は作らずなりぬ

旅中

がらんとして風ふきとほる宿なりき下に間が
りの人が物言ふ

あられふる二階やどりのわびしさよ下に所帶
の音ひそかなる

ゆたかなる今日とぞ思ふ用すみて晝間の汽車
にわが乘りて居り

余地峠

引き水は荒くすみたり家々の鯉見ありきぬ夕
ぐるるまで

落葉かなふる時雨かなといねたりしけさ高山
に雪はだらなる

自動車下り新墾の道霜ふりて紅葉づる山の低
きをぞゆく

赤紙はり悪しき病をいましむる村居はすぎて
芝山のみち

杉だるを信濃へはこぶ馬ひとつあひしばかり
に峠盡きにけり

何時の間にか登りつめけり檀がした賽の河原
の地蔵尊あはれ

枯芝の峠は平凡にきはまりてここよりは上州
の岩山もみぢ

信濃人信濃に下り芝山の上の浅間嶺われは仰げり

蝕栗を拾ふ山道おりおりて葱のたのもしさ村も近からむ

枯山をひとひあるきて夕ぐれの谷畑は霜にうち伏しにけり

谷深く岩秀にてれる夕日かげかげりては紅葉の黒ずみにけり

川くまの水車小屋より篁に白きとび粉の降るしづかさよ

吾が父が石灰やきて損したる青倉山に夕日かがよふ

高崎をすぎて

毛の國はいつもかわける冬の原あからさまにも吾が村のみゆ

しらじらと亞鉛を葺ける寺の屋根立ちそふ木さへなきがさぶしさ

又ふるさとにて

青松山しらゆきふりて靜かなるこのふるさとにいつか歸らむ

日ざしよき緣側の家は賣られたれど夢にしばしば吾ありにけり

弟とわれとやま水をのみけりとおもふ谷にも
雪ふりてみゆ

猪林に麥の握飯を食ひしさへあはれとぞ思ふ
死にし弟

故郷をいでて來にける祖母も老い病みほけて
月ぞ經にける

とみ人は老いてめでたしいや更に長き命をう
ときおほはは

去年よりふるさとをしばしば通れどもむかし
の人はかつてあはざり

椎のふる葉

椎のなき國にそだちてめづらしからむ落葉を
こめて送り來れり

椎のふる葉あをきつた草や送りこすこころ幼
きを遠く住み居て

箱さげて子供はありく土くさき落葉を疊にま
き散らしつつ

西のうみの島山みちのおもほゆれ母となる君
よ靜かに住まはせ

千曲川

ひさかたの雪の國原つらぬきて遙かなる河こ
こによどめる

山もくにもふりうづみたる白妙のまほらひと
筋にうち淀む河

兩岸の石の小さき渦泡のよどみがままに水く
だるなり

雪つもる山の迫門分きゆく河の水はいきほふ
瀨も立たなくに

半日を汽車の中より見し河の胡桃木のあなた
に今ぞ瀨に立つ

ストーブに人の少なき汽車は更に越後界をさ
してゆきけり

水内郡

春おそく大霜ふりて綠野の羊齒は杉菜は黑く
こがされぬ

青々と萌えにし狹間いりゆきて霜にうたれし
胡桃の木あはれ

くるみの木うれまで霜にやかれたる芽はくろ
ぐろと雨のふり居る

夕ぐれて水の靜けさ新萌の墹の小菅を押し靡
け落つ

水内の郡越後に近き夕まぐれ墹の短菅花にい
づるさへ

萌え立ちし行李柳を扱きつれて雨ふる田居に
人群がれり

扱きのこす田の挿やなぎなみなみと靡くがか
らに淀む川みゆ

妙高山麓

白玉の朝の光か雨霧らふ山の谷間に雪のこり
つつ

朝鳥はひとときにして止みにけり霧にこもら
ふ山鳩のこゑ

山鳩のこゑは谷間にくぐもりて木魂は霧のあ
なたにも聞ゆ

足びきの山よりくだる霧の秀に匂ひさびしき
山櫻花

飯山正受庵

橇を引く人にも來る娘にも問ひしかど正受庵
は知らずといへり

とけゆきて汚き雪の高道に人もあへやとなづ
みつつ居り

山すそに二つ出でし丘正受庵は木立あらき方
と人の教ふる

石標いりゆきてなほ人家あり垣も木小屋もふ
り埋みつつ

いち早き雪ぎえ所の青き草蕗の薹はつまれて
あとばかりなり

ふりしける下ゆく水や汲むならむ雪きりうが
てりどの家もどれも

庵の屋根に青き苔むら水づきて雫にぎやかな
り障子の前に

正受老人世をあり經けむ庵古り釜の蓋こそあ
らはなりしか

三月の晝すぎ雪のやはらかし庵を下る足はし
びれて

重箱さげ雪の上の道よけくれし媼は庵にのぼ
りゆきけり

左千夫先生十五回忌於普門院

來ざらむと言ひにし人の遂に來ず來れる君は
白髮生ひにけり

年月のすでに久しきみ寺に來て今日の思はい
たく靜かなり

香たきて仰ぐに親し先生がほめし天蓋の唐花
のかた

思ほえばこやせる御顏大きくあり眼鏡もとも
にをさめまつりき

いくたりか亡き御子たちの墓じるし墓地の地
上になかば埋まれり

菱の花あさざの花もなくなりて人の住居こそ
近く立ちたれ

龜

炎天の土に甲良を仰向けてつながれしままに
龜死ににけり

石炭の上にのぼりて居りし龜死にておつるを
兒は見きといふ

姑の訃に故里にかへりて

うららに雲雀あがれば幼兒に桑の實くはせ
しばし居りけり

ためらへる心にあらず桑の實に染まれる子等
にわれやなづまむ

悲しみに人あつまりて繭の値の話するなかに
われもすわれり

ひと度は言にいひたきことありし人こそ今日
は死に給ひける

竹やぶに筍はゆるところなりつひに人なき家
のあさあけ

人々の喪に

友死にて夜半にきこゆる鳥がねは子供の時の
如く寂しき

死ぬといふことを思へば夜ふけて幼兒の如く
われおそれ居き

やぶからし茂り荒々し朝より暑き荼毘所に餘熱のして

今日もまた晝寢つづけつ午後となり人とぶらひに出でゆかんとす

生者吟

友はさきに上野公園よこぎり居り淺草寺にゆくにやあらむ

幾度か水のみにけり照りつくる町を吾等ならび行きつつ

事しあれば淺草寺に來るなり君がみ葬はてて來にけり

お寺の屋根ななめに仰ぐ銀杏かげ汗あえながら君をかなしむ

稲荷社に詣づる女しげくなり暮れかかるまで君がことを云ふ

清々しく君死にけりと思ふさへ暗き大川を蒸汽ゆきけり

ゆきめぐり夜やおそからむ氷屋の灯すがすがし汚き町に

醜く生きてあはれとあらねども夜ふけて空をゆく鳥のこゑ

坂本先生を偲ぶ

やせやせて籐の枕を手にもたし苦てる光にすわりいましき

静かなるみ言葉きけばわが身さへ苦の青さに染むと思ひき

初秋雑詠

ふりつづくとみの涼しさ浴みつつ何か身ぬちに忘るる如し

櫻落葉苔にきたなく散るみれば易きになれて吾ありにけり

苦青む秋となりつつ亡き人のやうやく多き我を思はむ

子供等を

海にゆく約は今年も果さねど子供等もなれて
今は言ひいでず

栗くるる自が祖母の死にたるを今日の遊びの
科にはする

ただ一日小湊寺にゆきたりし海の話もいつか
忘れし

清水越

うちつづく尾花のたけの高ければ花粉はかか
る頭の上より

幼き日天に霧らへる雪と見し清水の嶺呂を今日ぞ越えける

谷ふかく殘るしら雪に眞日の照り尾花がそよぐ峠よりみゆ

越後より干だらを脊負ひ越え來にし人はゆくなり尾花が原を

泥鰌うりて歸る翁も聲かけぬ上毛越後の國ざかひの山

空桶を負へる翁を見かへれば吹かるる如し草山くだりに

紀伊路ゆき熊野の山に居りにける山蛭がこの谷みづにゐる

雲の居る峯よりくだる山水の岩ほの上に白く
見え居り

ふり積みし雪のなだれや削りたる石あたらし
き山みづを飲む

雪に押されし榛の芽ぶきは遲くして梢すずし
き風の吹きをり

雪のこる山をこえ來し宿りにて玉蜀黍を燒き
つつ食らふ

妙高溫泉

つよき日は草野のうへにさしながら野分に似
たる風のふきゆく

草の秀の光目煌はし日の中を歩める人をふきすぐるかぜ

あかあかと山崩にさす朝の日は青きはざまを照らし出だせり

浅間山

ひとすぢに浅間の煙よこぎれる空は仰がむ毛野のふるさと

たたなはる青根がうへにむかぶす浅間が嶽のいろは秋づく

秋かはる色もみるべし煙のかげややいただきに落ちてうごけり

ゆふされば寄りふす雲や立つ煙ひとつになり
てたなびきにけり

信州往來

乘りかへし汽車に座席の定りて草紅葉する川
原こえゆく

あざやかに草紅葉する川原のあるさへ忘れゆ
きや馴れにし

碓氷嶺やわが通ひ路の散りはてて今日しらじ
らと落つる澤水

山寂びて隧道を守る家の戸に青菜かけたる安
けさ思ほゆ

うづまきて白雪の上に亂れたる煙ながらにゆ
ゆしき淺間嶺

冬はやき信濃の國に入り來り枯野がうへの靑
菜ふく風

昭和三年

妙高池の平にて

あかあかと山の紅葉をわたる風音たててがら
す戸に吹きあたるなり

もみぢ葉はてりつつ寒き山を見て濁る溫泉に
からだしづめむ

いただきに亂るる雲の吹きすぎてはだれや散
ると見ゆる山肌

こがらしに向ひて吾等登り來しひろき墾道は
山に盡きたり

目のまへに鎖せる山莊は立つ紅葉がするの海
はくもりて

音たてて軒端の萱をふく風をしばし晝寢のさ
めし時きく

おとろへし人の如しもがらす戸の内より山の
風に對へり

祖母を悲しむ

たてまつる枕花は損料といふかなや長き一生
は足りし日なしに

佛づくりかがまる骸ををさめまつる棺に蟲く
ひの孔をさびしむ

にはかなる寒さのゆるびはふり道の狹き通に
ものにほひ居り

時ならず今日暖しせまき家を開け放ちつつ齋
をいただく

足らざりし御世はをへたれ孫ふえてみ柩めぐ
るせめて思はむ

木曾の花祭り

藤の花つつじの花と束ねたる朴の若葉のてり
のよろしさ

水桶にもろ伏す朴のやはらか葉聖生るるを待
ちがてにする

つつじ花散りてはかなし藤浪も朴の若葉も聖
まつらむ

ひとつ松たてるたをりをめぐり入り住める家
居も花捧げたり

驛路の木曾の家々手桶おきて生るる聖に花た
てまつる

ひとかかへ手桶のなかに捧げあまり筧に生け
し藤浪の花

せんまいは山蔭にしてほけほけし慈悲心鳥を
こひて來にけり

今宵のみ來鳴かぬといふ慈悲心鳥われはこひ
待つゆづる葉の山に

山川のとどろとどろと暮れゆけば西の狹間の
光こほしも

西ぞらの檜原の山にあかねさし暮るる夕は明
日をたのまむ

信州別所

植木屋ら剪り枝よする音きけば夕ぐるるまで
坐り居しなり

朝けよりかかり居る仕事手につかず觀音に參
ればをみなぞ來る

心もち落ちつかむとぞ石の湯にふたたび浴み
ぬともしつくころ

下草は青きながらにしどろなる土にひるすぎ
の霜のこり居り

錢いれて開けたる木戸のきしむなり夕ぐれの
寺に塔を見に來つ

塔を見て下る門前に籾俵つくれる人も結ひを
へむとす

久宮樣御葬列

みはふり路おそく參ゐ來て幼子の手を引き急ぐ人垣の前

いとけなき宮のまかりぢ立つ民のおほかた幼くあるがかなしさ

春の日になびかふみ旗すぎにけるみ行を送る子ども抱きて

みはふりを拜みしかへり鳴りいでし雷ちかし子どもを負ふ

小此木信六郎先生を哭す

命せられしフーフェランドの飜譯は年渡れるに果さざりけり

氣にかかる飜譯はおきて歌つくり居りし夜ふ
けにかなしみを聞く

うろたへて吾れ立てるなり速達を握りたるま
ま再びすわる

助けられし貧しき日さへ忘れつつ吾ありにけ
りこの年ごろを

貧しき吾を先生に訴へくれし福迫馬陵氏も世
になし今は

僅かなる仕事に金を下さると降りましし姿と
はに思はむ

先生がはげましたまひし學問もおよそに捨て
て歌もてあそぶ

死にたまふ人に負目をゆるさるる如きさびし
さにかなしみまつる

迎春賦

冬外套ぬすみさられてまだ寒き春のゆふべは
身にこたふなり

あたたかに外套のかくしに入れおきし手袋は
盗まれていづちゆきけむ

冴えかへる夕の町に浅葱の並べる見れば和む
思ひあり

目論見し伊豆の温泉も行きがたし頓にけだる
き身や養はむ

鹽湯たつる鹽ひとかます買ひ入れて春のやす
みを籠らむとする

春ゆき夏來る

池鯉のここだく死にて浮べるは雪代水にうた
れしならむ

流れ合ふ池の水口にあぎとふは生きのこりた
る鯉群るるなり

春の水みなぎらひつつゆく時に死にたる鯉は
かたよせられぬ

汗ばみて夜なかの地震に覺きし吾は宿屋にと
まり居しなり

地震すぎて衢の上にありきとふ醜き死を思ひつつ寝る

面倒を言ひつづけ居りし午すぎは思ひつきたる胃の薬のむ

戸を閉めて物の香こもる宵ころを下水にあつまる蛙うるさき

心しなえありなれながら早梅雨の晴れし夜空の行かましきかな

荒川水門

乾きたる道を來りて青草の堤のふき井のめば清しさ

大川は水上ながら夕しほのこの水門に來りいきほふ

土手の上の工事のこりの人造石人來りては蹴おとすらしき

蹴おとしし人造石は土手腹の青草凌ぎやがてとまれり

かたまりて松葉牡丹の生えてゐる水門監視舍の前をゆき來す

水の上はさへぎりもなき山彦は鐵の扉のひとところより

さし來る夕ぐれ潮に水門を漕ぎ去にし人は草がくれたり

日常吟

睡蓮の葉のあぶら蟲退治むとまきし藥に魚は
死にゆく

ミシン踏みて夜ふかす妻も聞けりといふ梟は
電車の絶えし時啼く

子供等が來り告ぐらくふくろふはとなりの家
に晝も飼ひてあり

眞遠くに夜半にひびかふ梟はつながれありて
啼くと思へや

吾孫子の古き沼より採りて來し藻草に蛭の子
が生れたり

西國よりかへる

東京に雨つづけりと汚れたる障子を閉めて妻子ら住めり

高き熱いだしたりとふ幼兒の朝飯むさぼり食ふを見たり

錢湯に子等つれいでて東京の蟬の靜かなる聲に氣づきぬ

すこやかを人に言はれて歸り來ぬ家の子供等は腹ぐすり飲む

明るき海にあそびて來しとさへ妻らに言はず晝寢つづくる

父病む

病づきあわてて吾を呼びよせし父は安らかに
金のことを云ふ

死病ならば金をかくるも勿體なしと父の云ふ
ことも道理と思ふ

氣輕くいひては出づれ歪みはてし顏のむくみ
は氣にかかるなり

電車のりかへに夕河岸の雜魚を買ひにけり道
道にして腐るにほひす

祖父のやまひ氣づかふ妻子等に潮たるる鯊の
包をわたす

秋となりて

蚊帳つらぬ夜頃となりて念佛集枕邊におけば
ただ寢つきよし

家くらき樫の一木は物干より月夜さやかに照
りわたるなり

わすれ居たりし梟の聲秋となりて明るき月の
下はさみしき

休み日の家居は久しぶりならむ炎の立てる畫
の火事見つ

小鳥籠寺につみ上げし燒跡を相つれ立ちて子
等と見に來し

阿蘇噴火口にて

鎔岩のうへゆく水を渡りしより霧こむる中を
久しく歩めり

霧はれて立つ火口壁の岩の間になほなづさふ
は噴煙ならむ

並びたる火口ひとつは浅くして泥の乾われし
痕しづかなり

沸きたぎる火口湖の中にあはれなる洲のあり
て煙立ちをり

乳色の硫黄の湖は沸きたぎりよりあへる水泡
とどまらなくに

火口の底につつめる湖ふたつ沸きたつ傍に澄
むは静かなり

わきかへる湖の煙はひとすぢなれ静かなる湖
にさざ波のたつ

たぎり立つ湖のさわぎは聞ゆるに細き湧き水
の流れ入りつつ

霧ながら火口湖のこゑは聞え來て燒山原はい
ましめて踏む

霧すぎて燒山原の見わたしをみどり頼もしき
垣山のある

伊香保榛名

秋草の峠の道にきこえ居る雲雀はひとつ八月の日に

かはるがはる幼き二人おぶひつつ登る峠に夏雲雀なく

夏たけし谷にひびきて啼く雲雀亡き人の言ひしこと思ひいでつ

雲のかなた父がふる里ありと言へど子供は餘り感せざるらし

落ちたぎつ溫泉ひびけるさ夜更けて子供襲ひし南京蟲殺す

南京蟲に耳螫されたる幼兒を酒くさき溫泉醫診て歸りたり

父も子等も所在なしなる裏二階今日も物干に
雨の降りゐる

子供等と浴みつつ思ふ幼くて我が來しことは
ただ一度なりき

演藝會に人集まれる靜けさや聲あげあそぶ子
等とゆあむる

外濠小景

秋あつき風と思へる堀水にみぢんこ赤く吹き
よせられぬ

雨あがりのすぐ乾く見附の石道を下りつつみ
ぢんこのただよふを見つ

秋づきてひとつこぎ居る貸ボートみぢんこ浮
ける岸にはよらず

刈りあとに伸びたる草のやはらかき土手を野
分の風あれにけり

きたなき堀のたたへよ今日みれば咲く水草あ
り瑠璃色のすみて

當所思古之歌　越前氣比神宮

神の庭にわづか四角に殘りたる池の蓮のくれ
なゐの花

いにしへの寶池の花はちす朱はかがやくま晝
齋庭に

赤間が關阿彌陀寺御陵

八百日ゆく潮路はるかに漂ひて護りまもられ
ここに果てけむ

おびただしく骸は寄りて黛の落ちにし君を誰
とかは知る

うつし世のあはれ留めよいとけなき御門をか
くむ平氏等の墓

備後鞆の津

ま夏日の照りかへしつよき白崩の島の室の木
若木ばかりなり

ま遠くは空と霧らへる白土の島門ゆきかよふ
舟は今日も多し

年老いし大伴の旅人妻戀ひに舟はとどめて小
夜を居りけむ

筑紫觀世音寺

いにしへをとどむるものは夕陽に花とざした
る蓮のくれなゐ

笠の麻呂も沙彌滿誓のあけくれは口紅といふ
蓮いとほしみけむ

たわやめの笑まひさかゆる花蓮にほひは淨き
土にかよはむ

久留米には高山彦九郎の墓ありと聞く

言にいはず筑紫のはてに腹切りしわが上野の
君をかなしむ

御大典間近に

百穂畫伯ゑがける行幸の繪を見れば駒もとど
ろに踏み並めてゆく

大御行ありのままなる繪を待ちつ衢にいでて
新聞を買ふ

無産派の議員行幸を拜みてかしこみたりとふ
記事をも讀めり

萬歳旛に少しく降りて神々しゆふべの町は子供等とゆく

かがやける菊の二花値をききておどろく妻も憎からなくに

十一月十日吾が家はいかにことほがむ兒等の喜びかねて著しも

昭和四年

木曾伊那

しばしばも行く道にして晴れ渡る御嶽山を今日ぞ仰がむ

檜原山谷ふかく入る鐵道を見れば行きたく年すぎにけり

うち黒む檜原の山やかがやきし紅葉しばらく
にちり過ぎにけり

夕かげは檜原の山のあざやかに冬木の立つは
乏しきものを

ゆきなれて親しと思ふ道のべの榧の青き實人
うち落す

夜もすがら鳴りとどろきし川の瀬は五百箇岩
村に白々として

そき立てる檜の木の山を仰ぐにも竹生ふる人
の家居しづけし

友ありて今日ぞ下り立つ石村のかげにさ走る
魚の子を見し

のりこみし乗合自動車間のありてなほしばら
くを人と話すも

笹の葉に紅葉ちりしく峠にてしぐれの雨は雲
ながらふる

膝がしら冷えいちじるくなりし時青菜まきた
る村里に來し

峠こえし里もしぐれて御大典ことほぐ人等ぬ
れつつゆけり

君が家の朝しづかにふる雨は柿の實うるる木
ぬれよりふる

さきはひはいやますますに生れいでし幼兒も
父に母に似て笑む

のりかへの時間を待つと買ひにける新聞に君
がまがごとを讀む

日常吟(一)

うちよりて死にたる伯父に水かくる夢に覺(おどろ)き
し身は冷え居たり

頼み來しすこやかささへ衰へてあるかと思ふ
時ありにけり

足袋はきていねたる足は吾ながら疎(うと)ましくし
て眠りがたしも

子供服ぬひかけしままに妻寢たる家にかへれ
り一時すぎならむ

外濠(そと ほり)の土手の青草おしなびけふりたる霜はしろく殘れり

偶感

言(こと)あげていまその人を談りつつおのづから疎(うと)き年月を思ふ

ことに云へばたやすかれどもみ佛も盲(めし)ひし龜を示したまへり

讀み更かし心たかぶり居りながらいぬるこの夜はうらやすらけし

歳末歳首

用のなき年の暮をば來りけり淺草は多くもの
休みたる

煤掃のごみはき出せる石道はさざえ煮賣もい
まだ出でざらむ

午前の光あらはなり活動の小屋の前にて造花
を踏む

伴へるわがをみな子のおみくじは九十一番大
吉を引きあてにけり

子供等を引きつれ出でし年の暮三越に來て小
便所きく

久しぶりに暮の街にて逢ひし友の葱ひと叺お
くらむといふ

年のはじめに來ませる君はわが路地に猫の骸
ありたりといふ

路地口に今日出て見れば花屋にて捨てたる花
がこぼりつきたる

吾が新年

クリスマスの樹を喜べる子供等よわが幼きに
はいたく變れり

富み人の如く振舞ふ子供等と鴨一羽割く年迎
ふべく

觸れ賣の門松まちて立つるさへ年迎ふるはう
れしかりけり

子供等と淺草ゆきをすませてはまた用のなき
年はじめなり

信濃路は木曾の友より送り來る栃餅といふを
まつは樂しき

阿蘇湯の谷安居會にて

安居會の晝の休みを廢れたる古湯に來り浴む
は靜けし

はだかにて野菜きざめる男あり麓の村の人や
來浴むる

毀ち殘る家に宿りの浴客晝炊ぎせり眞日てる
庭にて

かつて此所に榮えし溫泉山鳴りてほろびゆけりと語る親しさ

御大禮觀兵式の日

飛行機の分列すぎし後にして連れゆく雁のすがすがしけれ

とよもして飛行機ゆきぬつらなれる雁は啼くとも思ほえなくに

うち交はす五つのつばさつばらかに朝の空を雁つれてゆく

飛行機の分列式を見る屋根に雁が行くとぞ人叫ぶなる

父なほ病む

親しからぬ父と子にして過ぎて來ぬ白き胸毛
を今日は手ふれぬ

遠々と來て診たまへる君がまへにくどくど病
を云ふ父を聞く

病む父がさしのべし手はよごれたり鍍金指輪
ぞ吾が目にはつく

わが父の病を診むと來たまへる君と淺草のみ
寺にまうづ

區劃整理に取り拂はるる此の町に古泉千樫か
つて住めりき

新しき橋渡りつつ大川に游ぎて生きし友のことを言ふ

日常吟(二)

參道の並槻のうれにとほ山の夕づくいろは今日も見にけり

支那燒の火鉢えらめり年末の店びと吾を怪しむまでに

翁さぶる年いたれりとあらなくに火鉢を買ひてひと日寄り居ぬ

久しぶりに昔の人の尋ね來て工面よくなりし友の話きく

罪なはるるうからを放ち己が身をもはら守れ
るは夢にてありしか

夢みても吾は卑しき清々とある夢をだに見む
よしもがも

あやまたず一世を終へむ願いやし忘れて安く
居る日あれかし

茶臼山雲水寺歌會

ひろき室にもの言ひつかれ終日に戀ひし日影
は夕暮となる

竹村はひとひ日あたれり夕影に池より立ちし
鳥のしろけれ

三月某日

整はぬ春の芽ぶきの下道に日にゆるみたるア
スファルト踏む

故人のわづかばかりの印税をわれ受取りに丸
の内に來ぬ

晝やすみの帽子かぶらぬ人なだれ包を持ちし
吾は横ぎる

うららなる春の衢をかへり來て火の氣たえた
る部屋にやすらふ

母がぬく父の白毛を順番に子等は貰ひてもて
あそびゐる

箱根行

ふりさけて富士が嶺みれば前山の野火の煙は
眞日の下なる

春日さす山の岩秀を走りたる水の光は仰ぐべ
きかな

細竹山を風ふき向けてさわげども馬醉木の花
ぞにほひ榮ゆる

湖の邊の冬木の山に道みえて向う岸なる家の
親しき

信濃松原湖

夜行車に來りし吾は山水の激に下りて齒みがきつかふ

今朝の汽車辨當を殘し來て食ひ居るからだの疲勞を思ふ

春すぎてゆくと云ふことも思はざりき櫻のこれるに今日は遇ひける

うちかすむ村はまひるの蛙のこゑ疊のうへに覺めてまた眠る

湖のへの家に眠をむさぼりてわか芽立つ谷を見にゆかむとす

あさつきはすでに黄ばめる草はらに散れる櫻の花をながめつ

日常吟(三)

かせひきて食慾のなき夕食に鹽鮭を買ひ焼く
をたのしむ

かへり見て思ふとなけれよきものを食らはむ
をりはなき吾なりき

蕨汁に鰊をいれて食ふことを妻も子供もよろ
こびとせず

家うちに物なげうちていら立ちつつ父を思ひ遺
傳といふことを思ふ

いきどほり妻よぶ聲の父親に似て來しことを
吾知りて居り

しかすがに草野の中をゆく水をこひ思ひつつ
眠る今夜(こよひ)も

六月二十六日

醉ひしれてかへり來りし曉に佛のふみよむ何(なに)
故(ゆゑ)となく

死近(しにちか)き父と思へど言ふことのよろしからぬを
今朝もさびしむ

父死ぬる家にはらから集りておそ午時(ひるどき)に鹽鮭
を燒く

死近(しに)くなりてふる里を戀ひにける父をやせめ
て親しといはむ

七月二日一家總持寺に詣づ

松の葉は白きほこりか山内の道芝いたく踏み切られたる

眞日てらすみ堂かしこし立ち寄りてこの若木かげしばしいこはむ

かげりたる砌の石の苔ふめば乾き立ちたる日に詣で來ぬ

相ならび行きてぞ思ふ事なくて兄弟集るはまれとなりたり

かき上げし藻草のかわく池の邊に今日來ぬ一人の弟をおもふ

横濱の港のみゆる崖に來て伯母が言ひいでし
ところてん食ふ

盛夏雜詠

暑き日のさせる朝戸(あさと)よ路地(ろぢ)の上に青き松の葉
散れる靜けさ

へりてゆく金魚の鉢に今宵また買ひ來りたる
ひとつを放つ

あかつきにみんみん蟬の競(きほ)ふこゑ今日は今日
する仕事をぞ思ふ

暑き夜の更けたる路地に松ありて月のかかれ
る時に歸りぬ

かたづかぬ旅だちながら汽車の中は宵はやく
寢む樂しかるべし

健(すこや)かにありつつ堪へぬ暑き日や死にゆきし父
をせめてなぐさむ

唐津

暑さややすぎたる唐津の濱に來つ磯の小島に
渡りて遊ぶ

虹の松原といふ名所も暑き夕日さし城跡に居
て西瓜(くわ)むさぼる

唐津の海領布振(ひれふる)山(やま)の空すみて立つ天の川今宵
仰がむ

霧島山

高千穂はおのれそそりて高天の眞澄にさびし
焼山のいろ

新燃といふは火口の跡ならむ草山の緑そこに
迫れり

大分紅蓼庵

君が若子庭の松の木寫生せりその松を見れば
ゆたにやすけし

別府

青山のはざまに立てる温泉のけむり夕かぎろ
ひにあはれ白しも

蜻蛉は蟲といへども血の池におびただしくも
浮きて死にたる

高松港

朝明の港に一人おりたちて栗林園の道をきき
ゆく

船のうへの眠のこれり山彦のかすかなる園に
しばらくは居む

おもしろく造れる庭をゆきはてて竹の林に入
るは静けし

篁の外は草あらき瓜畑朝のくもりにしばし息はむ

潮ぐもり

靜なる冬日の衢ビルヂングの空に亂れて鳥の渡れる

頭重く何も出來ざる日なりけり町の霧らひは天氣はるらむ

用のなき電車にのりて終點の永代橋に下されにけり

川口は眞晝の潮の引け居りてモーターボート溯りゆく

地震にて崩れし煉瓦に青々と海苔のつけるは
心和まむ

新しき橋つくり居り赤々と燒けたる鋲を投げ
かはしつつ

鋲を打つ器械の音は電車にて川を渡りしここ
に木魂す

歳晩雜詠

家にある幼等がため出で先なる伊豆の蜜柑の一
箱を買ふ

伊豆の國三津の濱人年越すと海鼠を突きに舟
のり出だす

潮騒に人は乘りいでて年越しの魚を突けり話しながらに

閑ある吾にあらねど潮さわぐ海の邊に來て年の暮となる

大晦日の家にかへりて人のくれし鴨に鹽引にさくは樂しき

幼等は樂しかるらし松飾は今年も見切物かとぞ言ふ

卷末記

この集に收めたのは大正十四年から昭和四年に至る五年間に亘る自分の所作である。即ち大正十四年に刊行した歌集「ふゆくさ」に繼ぐものである。

配列の順序は大體雜誌アララギ發表の順序に依り、他の新聞雜誌にのせられたものは多くアララギへ轉載の順序に依つたのである。それ故必ずしも歌はれた事實の順序には從つて居ない。今、集に關係ある各年の事實に就いて心覺えを記して置く。

大正十四年

「明日香にて」「吉野菜摘村」は大正十三年の二月の旅行である。其他は大體この年の事柄が材料となつて居る。この年は比叡山にアララギ安居會があつて、鳥

木赤彦、岡麓、齋藤茂吉、中村憲吉諸氏と共にそれに出席した。「叡山所々」はその時の作であるがこれは集中ではもうすこし後に送つてもよかつた。尙、會の果てた後岡氏、齋藤氏などと共に大和から高野、和歌の浦に遊び更にそれから齋藤氏及び武藤善友氏と共に熊野へ越えた。その時の作は大正十五年一月に發表したのでこの集でもその年次に出した。

大正十三年松本を去つて以來、下野足利に居つた家族はこの秋、田端へ移つて來た。田端轉居に就いては芥川龍之介氏が色々世話をしてくれたのであるが、今はそれもなつかしき思ひ出となつてしまつた。

大正十五年

三月島木赤彦氏が逝去された。島木氏は大正七年自分が信州に奉職する前後からは單に歌の上ばかりでなしに、實生活上種々の方面での指導者であつたのであるが、忽にして世を去られたことは自分には思ふ所が多かつた。しかも

自分は、島木氏が死の床にあつて自分の爲にはかつてくれた、信州に於ける再度の仕事のために、この後二年間ばかり長野に往復した。この集に名づけたのは一つはその頃の氣持からである。二女梅子が生れ、田端から下落合に轉居した。この年三峯山に安居會が開かれた。平福、中村諸氏も會合されたが、殊に會後、岡、齋藤藤澤、高田諸氏と共に生國上野に遊んだのは思ひ出が深い。「武藏秋川峽」は大正十一年の旅行であるが、その他多くはこの年に經來つた處である。

昭和二年

この年は芥川龍之介氏が逝去し、古泉千樫氏が逝去しその他近親にも死に行く人があつたので、伊藤先生を思ひ、坂本四方太先生を思ふやうな氣持が強く動いて居た。この年は越前永平寺に安居會があり、會後、平福、岡、齋藤、中村、加納諸氏と和倉に遊び、妙高溫泉に一泊した。長野から千曲川について下り、淸水峠を越えて鄕國へ下つたのはこの年の旅行である。鈴木忠一氏が同行してくれた。

鈴木氏とは前年余地峠を信濃から上野へ越えたこともある。その作もこの年に收められて居る。秋、齋藤茂吉氏と共に妙高温泉に再び遊んだ。これは翌年の部に收めた。三女靜子が生れた。

昭和三年

祖母が八十九の高齢に及んで、貧しい父の震災バラツクで死んだ。この祖母は自分の幼時から母よりも親しく自分を育ててくれたので思ひ起す處が多い。この頃前後三年間ばかり木曾三留野の人々に招かれて往復して居つたが、この年及び昭和四年にはその時の歌がある。ドクトル小此木信六郎先生は、自分を貧しいうちに助けてくれた、幾人かの忘じがたき人々の一人であるが、この年なくなられた。自分は僅かではあるが、先生の學長たる學校の授業に從ひつつ、先生には疎遠をつゞけて居たので、今も悔恨の禁じがたいものがある。下落合から青山の今の家に移つた。この年は九州阿蘇に安居會があり、中村、加納、結城、高

田諸氏と參會した。會後備後鞆の津で、中村氏から一日の舟遊びをさせて頂いた。秋から父が病み出した。

昭和四年

二月大阪の歌會にゆき、三月は箱根で開かれた平福百穂氏の歌集「寒竹」の會で諸同人と會した。六月二十六日父は昨年からの病にたふれた。この年は安居會を休んだので自分は單獨で九州を旅行して來た。鹿兒島に於ける岡村氏、村田氏、大分に於ける内木氏その他多くの人々に厚意を受けたが、歸途は多年の宿意がかなつて備前兒島に赤木格堂氏を訪ねることが出來た。

この集をなす五年間は自分に取つては甚だ平穩無事の五年間であつた。周圍に幾人かのよき人々を喪つたけれどもそれは又止むを得ないことであらう。自分の短い生涯のうちには、この五年間位幸福のことは無かつたのである。これに就いてはアララギ同人の溫い交游と、大正十三年上京以來多大な推輓を與

へられた法政大學に於ける幾人かの先輩を心にしるして置きたい。

この五年間の歌作に就いては、自分としては相當に勉強したつもりである。然しながらかうして一卷に纒めて見ると、我ながら不滿のことばかりである。つくづくと力なき自分を情なく思ふ。殊に感激あつて表現の力なきため歌とすることの出來なかつた幾つかの心持をかへり見る時この感は一層深い。しかしこれは今急にどうすることも出來ないことである。希くは、現在の生活と健康とが幸して、自分の力でたどり着ける所までたどりついて見たい。

この集の刊行は一に齋藤茂吉氏その他アララギ同人諸氏の激勵によつた。山田良春、吉田正俊兩氏からは筆記の面倒をしていただいた。五味保義氏からは傍訓と校正のことを見ていただいた。岩波書店の岩波茂雄氏佐藤佐太郎氏からは出版について配慮を受けた。茲に記して感謝の意を表する次第である。

昭和五年十二月二日記　　土屋文明

昭和五年十二月十五日印　刷
昭和五年十二月二十日第一刷發行

往還集
定價壹圓八拾錢

著者　土屋文明

發行者　東京市神田區一ツ橋通町三番地　岩波茂雄

印刷者　東京市神田區錦町三丁目十七番地　白井赫太郎

株式會社印刷

（寺島製本）

版權所有

發行所　東京市神田區一ツ橋通町三番地　岩波書店
電話九段（33）一二一〇八番　一二八一番
一二〇九番　二六二六番
二〇二番（小賣部取用）
振替口座東京二六二四〇番

幸田露伴著　冬の日抄　定價二圓三十錢　送料書留廿七錢

幸田露伴著　春の日曠野抄　定價二圓五十錢　送料書留廿七錢

幸田露伴著　ひさご猿蓑抄　定價二圓二十錢　送料書留廿七錢

幸田露伴著　炭俵續猿蓑抄　定價二圓五十錢　送料書留廿七錢

沼波瓊音編　川他石校訂　改訂增補　芭蕉全集　定價四圓八十錢　送料書留廿七錢

勝峯晋風著　芭蕉七部集定本　定價二圓八十錢　送料書留廿七錢

沼波、太田、阿部、安倍、小宮、和辻、幸田著　芭蕉俳句研究　定價二圓五十錢　送料書留十八錢

幸田、太田、沼波、阿部、安倍、小宮、勝峯、和辻著　續芭蕉俳句研究　定價二圓八十錢　送料書留廿七錢

幸田、太田、沼波、阿部、安倍、小宮、勝峯、和辻著　續々芭蕉俳句研究　定價二圓八十錢　送料書留廿七錢

山田、阿部、小牧、村岡、太田、小宮、土居、岡崎著　芭蕉俳諧研究　定價二圓八十錢　送料書留廿七錢

山田、阿部、小牧、村岡、太田、小宮、土居、岡崎著　續芭蕉俳諧研究　定價二圓八十錢　送料書留十八錢

山田、阿部、小牧、村岡、太田、小宮、土居、岡崎著　續續芭蕉俳諧研究　近刊

太田水穂著　芭蕉俳諧の根本問題　定價二圓八十錢　送料書留廿七錢

太田水穂著　芭蕉連句の根本解說　定價四圓五十錢　送料書留廿七錢

荻原井泉水著　奥の細道評論　定價二圓二十錢　送料書留十八錢

荻原井泉水校訂　一茶句集　しだら　定價九十錢　送料六錢

東松露香校訂　一茶遺稿　父の終焉日記　定價八十錢　送料四錢

佐佐木信綱編著　分類萬葉集　定價四圓五十錢　送料書留廿七錢

佐佐木信綱解說　藤原定家所傳本　金槐和歌集　定價十五圓　送料書留廿七錢

井手今滋編　橘曙覽全集　定價二圓八十錢　送料書留廿七錢

大島花束編著　良寛全集　定價五圓五十錢　送料書留廿七錢

正岡子規筆　木版　仰臥漫錄品切

伊藤左千夫著　左千夫歌論集卷一　定價四圓　送料書留廿七錢

伊藤左千夫著　左千夫歌論集卷二　定價四圓三十錢　送料書留廿七錢

伊藤左千夫著　左千夫歌論集　卷三　近刊

伊藤左千夫著　増訂　左千夫歌集　近刊

島木赤彦著　萬葉集の鑑賞及其批評　前編　定價二圓　送料書留十八錢四

島木赤彦著　歌道小見　定價一圓五十錢　送料書留十八錢

太田水穂著　短歌立言　定價二圓二十錢　送料書留十八錢

島木赤彦著　氷魚　定價二圓五十錢　送料書留十八錢

島木赤彦著　柿蔭集　定價二　送料書留十八錢四

中村憲吉著　しがらみ　定價一圓八十錢　送料書留十八錢

土屋文明著　往還集　定價一圓八十錢　送料書留十八錢

藤澤古實著　國原　定價二圓六十錢　送料書留十八錢

結城哀草果著　山麓　定價二圓三十錢　送料書留十八錢

島木赤彦編　アララギ年刊歌集　第一　定價一圓五十錢　送料書留十八錢

アララギ同人編　アララギ年刊歌集　第二　定價一圓五十錢　送料書留十八錢

アララギ同人編　アララギ年刊歌集　第三　定價一圓　送料書留十八錢

アララギ同人編　アララギ年刊歌集　第四　定價一圓五十錢　送料書留十八錢

アララギ同人編　アララギ年刊歌集　第五　定價一圓五十錢　送料書留十八錢

アララギ同人編　アララギ年刊歌集　第六　近刊

木下利玄著　木下利玄全歌集　定價二圓八十錢　送料書留十八錢

茅野雅子著　集歌　金沙集　品切

夏目漱石著　漱石俳句集　定價一圓五十錢　送料書留十八錢

寺田寅彦・松根豐次郎・小宮豐隆著　漱石俳句研究　定價二圓二十錢　送料書留十八錢

夏目漱石著　漱石詩集　附印譜　漢詩　定價二　送料書留十八錢四

須藤五城著　五城句集　附短歌　定價一圓五十錢　送料書留十八錢

島田忠夫著　童謠詩柴木集　定價一圓七十錢　送料書留十八錢

佐佐木信綱編 新訓 萬葉集 上卷 定價六八十錢
佐佐木信綱編 新訓 萬葉集 下卷 定價四六十錢
佐佐木信綱校訂 文白 萬葉集 上卷 定價六一圓
佐佐木信綱校訂 文白 萬葉集 下卷 定價六八十錢
尾上八郎校訂 古今和歌集 定價四十錢
佐佐木信綱校訂 撰新 山家集 定價四十錢
佐佐木信綱校訂 新古今和歌集 定價四六十錢
佐佐木信綱校訂 藤原定家歌集 近刊
齋藤茂吉校訂 訂新 金槐和歌集 定價四十錢
芭蕉作 伊藤松宇校訂 奥の細道 その他 定價二十錢
伊藤松宇校訂 芭蕉七部集 定價四六十錢
小宮豐隆編 芭蕉連句集 定價四六十錢

伊藤松宇校訂 蕪村七部集 定價四十錢
一茶作 荻原井泉水校訂 おらが春・我春集 定價二十錢
野崎左文校訂 萬載狂歌集 定價二十錢
野崎左文校訂 德和歌後萬載集 定價二十錢
正岡子規著 病牀六尺 定價四十錢
正岡子規著 墨汁一滴 定價四十錢
正岡子規著 仰臥漫錄 定價四十錢
正岡子規著 子規歌集 定價二十錢
齋藤茂吉選 土屋文明選 左千夫歌集 定價二十錢
茅野蕭々編 上田敏詩抄 定價四十錢
島崎藤村自選 藤村詩抄 定價四十錢
蒲原有明著 有明詩抄 定價四十錢

アララギ叢書

第一編　島木赤彦・中村憲吉著　馬鈴薯の花　古今書院發行　定價一円八十錢

第二編　齋藤茂吉著　赤光　春陽堂發行　定價二円三十錢

第三編　古泉千樫著　屋上の土　改造社發行　定價二円五十錢

第四編　島木赤彦著　切火　品切

第五編　齋藤茂吉著　短歌私鈔　品切

第五編　齋藤茂吉著　續短歌私鈔　品切

第六編　中村憲吉著　林泉集　春陽堂發行　定價一円八十錢

第七編　齋藤茂吉著　童馬漫語　春陽堂發行　定價二円五十錢

第八編　島木赤彦著　氷魚　岩波書店發行　定價一円五十錢

第九編　長塚節著　長塚節歌集　品切

第十編　齋藤茂吉著　あらたま　春陽堂發行　定價二円四十錢

第十一編　伊藤左千夫著　左千夫全集　品切

岩波文庫詩歌俳句書目

薄田泣菫著　泣菫詩抄　定價四十錢　送料四十錢

土井晚翠著　晩翠詩抄　定價四十錢　送料四十錢

漆山又四郎譯註　杜詩一　定價四十錢　送料四十錢

漆山又四郎譯註　杜詩二　定價四十錢　送料四十錢

漆山又四郎譯註　杜詩三　定價四十錢　送料四十錢

漆山又四郎譯註　杜詩四　定價六十錢　送料四十錢

漆山又四郎譯註　陶淵明集　定價四十錢　送料四十錢

山田孝雄校訂　倭漢朗詠集　定價二十錢　送料二十錢

アララギ叢書

第十二編　松倉米吉著　松倉米吉歌集　古今書院發行　定價一円五十錢

第十三編　土田耕平著　青杉　古今書院發行　定價一円八十錢

第十四編　石原純著　霰日品切

第十五編　中村憲吉著　しがらみ　岩波書店發行　定價一円八十錢

第十六編　島木赤彦著　歌道小見　岩波書店發行　定價一円五十錢

第十七編　アララギ所編　大正十二年震災歌集　灰燼集　古今書院發行　定價一円八十錢

第十八編　島木赤彦著　太虛集　古今書院發行　定價一円二十錢

第十九編　村上成之著　翠微　古今書院發行　定價一円五十錢

第二十編　土屋文明著　ふゆくさ　古今書院發行　定價一円三十錢

第二十一編　島木赤彦著　萬葉集の鑑賞及び其批評　岩波書店發行　定價二円

第二十二編　岡麓著　庭苔　古今書院發行　定價二円五十錢

第二十三編　島木赤彦編　アララギ大正十三年度　年刊歌集　岩波書店發行　定價一円五十錢

アララギ叢書

第二十四編　アララギ所編　發行　故人歌集1　近刊

第二十五編　齋藤茂吉著　つゆじも　近刊

第二十六編　齋藤茂吉著　金槐集私鈔　春陽堂發行　定價一円八十錢

第二十七編　齋藤茂吉著　良寛和歌集私鈔　近刊

第二十八編　齋藤茂吉著　童牛漫語　近刊

第二十九編　アララギ所編　發行　故人歌集2　近刊

第三十編　平福百穗著　寒竹　古今書院發行　定價二円二十錢

第三十一編　藤澤古實著　國原　岩波書店發行　定價二円六十錢

第三十二編　島木赤彦著　柿蔭集　岩波書店發行　定價二円

第三十三編　アララギ所編　發行　アララギ大正十四年度　年刊歌集　岩波書店發行　定價一円五十錢

第三十四編　アララギ所編　發行　故人歌集3　近刊

第三十五編　岡麓著　歌話書　代々木維筆　近刊

アララギ叢書

第三十六編　中村憲吉著　歌集　近刊

第三十七編　アララギ発行所編　アララギ大正十五年度　年刊歌集　岩波書店発行　定價一円五十錢

第三十八編　結城哀草果著　山麓　岩波書店発行　定價一円三十錢

第三十九編　高田浪吉著　川波　古今書院発行　定價二円三十錢

第四十編　齋藤茂吉著　短歌寫生の説　鐵塔書院発行　定價一円七十錢

第四十一編　アララギ発行所編　アララギ昭和二年度　年刊歌集　岩波書店発行　定價一円五十錢

第四十二編　伊藤左千夫著　左千夫歌論集　卷一　岩波書店発行　定價四円

第四十二編　伊藤左千夫著　左千夫歌論集　卷二　岩波書店刊行　定價四円三十錢

第四十二編　伊藤左千夫著　左千夫歌論集　卷三　近刊

第四十二編　伊藤左千夫著　増訂　左千夫歌集　近刊

第四十三編　土屋文明著　往還集　岩波書店発行　定價一円八十錢

第四十四編　アララギ発行所編　アララギ昭和三年度　年刊歌集　岩波書店発行　定價一円五十錢

アララギ叢書

第四十五編　竹尾忠吉著　鵜　古今書院発行　定價一円四

第四十六編　高田浪吉著　作歌餘錄　古今書院発行　定價二円六十錢

第四十七編　齋藤茂吉著　念珠集　鐵塔書院発行　定價二円四

第四十八編　アララギ発行所編　アララギ昭和四年度　年刊歌集　近刊

以下續刊

古書一般
協立書店
浅草東映側
電話(844)2263